

Title	詩經の新古層辨別の一標準
Author(s)	高田, 時雄
Citation	中國文學報 (1975), 25: 1-10
Issue Date	1975-04
URL	<a href="http://dx.doi.org/10.14989/177307">http://dx.doi.org/10.14989/177307</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

## 詩經の新古層辨別の一標準

高 田 時 雄  
京都大學

詩經各篇の成立年代を明らかにすることが無意味でないことは、誰しもの意見の一致するところであろう。それを古代史の資料として扱うにしても、言語史の素材と爲すにしても、それは第一に要請される基本的な作業でなければならぬ。また極く普通に、文學史上の特筆すべき一頁として見る時でさえ、對象を確かな背景の下に位置づけたいと思うのは、極めて自然なことのように思える。

傳統的な詩經學はその各々の詩篇の解釋とともに、それに不可分のものとしての年代觀を伴っていた。それは雅頌について言えば、創業期の文王・武王の代から西周末の幽王の代に至るまでの各王に、詩篇のそれぞれを配し、美刺の觀念を付加することによって、儒家風の政治的・教育的な原理を説くものである。おそらくは民謡である國風につ

詩經の新古層辨別の一標準（高田）

いても、同じような歴史的な説明が加えられることは、雅頌とともに事情は一貫したものを持っている。たとえば「緇衣、美武公也……」（毛序）、「蟋蟀、刺晉僖公也……」（同）等々。そのすべてを列擧することには意味はない。ただすべてがこのような風であることを理解すれば足りる。それらは詩の内容と合わせ見るとき、多く牽強附會の譏りを免かれ難いものであり、現在我々が詩を讀むとき、最も奇妙に感ずるところである。

そのため詩を詩そのものとして、あらゆる古い解釋にとらわれることなく讀もうとする努力が、近代以來にいたるまでなされてきた。それによって生み出された新解釋は一定の成果を収めていると言えるであろう。そしてその上で改めて詩の成立年代を考察しようとする試みもやはりあるのである。松本雅明氏の『詩經諸篇の成立年代に關する研究』（一九五八）は、少くともその大きさからいって、最も重要なものの一であることは疑いない。ただその結論には問題がないとは言えない。本稿は主としてその年代決定の標準に對する反論の試みである。

松本氏は絶對的な成立年代を確定する準備として、興發想の轉化およびその詩形との關連より、相對的な新古の層の辨別を行った。それは氏の結論の第一段階といつてさしつかえない。

「一般に國風は古く、雅・頌には發展し、もしくは形式化した新しい詩篇が多い。……すなはち民謠が宮廷歌に編成されることはあつたが、宮廷歌が民謠に轉化した例はみられなかつた。」（頁三六七）

つまり結論の第一は、國風が雅頌よりも古いということである。この前提の下に、氏は最終的な結論を次のように下している。

「國風のなかの古朴な部分は西周後期の成立であるが、小雅・大雅・頌では後の二つにいくらか西周後期の詩がみえるほか、その大部分は東周にはいつてからの作品で、

その末期は春秋中期、すなはち前六世紀の初めに及ぶことが明かにされた。」（頁九四六）

一千頁に近い巨冊がこの結論を導くために捧げられている。その中で論じられていることは、必ずしもすべてが結論との關連の下でのみ有意義であるような種類のものではなく、結論が誤っていればとて、ただちに價值を失うものではない。これは前もつて云つておくべきことであらう。たとえば興についての研究などがそうである。その他、古代祭禮の復元など興味深い點もまた多くあるが、一一について觸れることは、本稿の目的とも關わらないのでしない。私はここでは、ただ年代および新古の層に關することだけについて取り上げたいと思うのである。

今舉げた松本氏の結論の後者、つまり絶對年代についてのそれは、第一の結論を前提として始めていえることであることは注意を要する。もし結論第一が不幸にして誤つていたならば、結論第二は根柢から覆らざるを得ない。ところでその結論第一は、見たところ、松本氏の主觀によると

ころがはなはだ大きく、不安定な要素を含んでいる。たとえば興的發想の自然的・直接的であるか、あるいは定式化されたものであるかを見分けるのに、絶對誤ることがないであろうか。そして何よりも原初的とされる國風の諸篇が、より形式的な雅・頌と同時、又はそれより後に存在してはならぬという理由は何もない。これは吉川幸次郎氏の書評『東洋史研究』17—3）がすでに指摘する。歴史の發展は不均等であり、異なつた發展段階にあるものが同時に存在することは普通のことである。それに對して松本氏のこのような形式的・主觀的思考は歴史學者として致命的な缺點であるとせねばならない。原初的な發想は時代を降つても存在するし、原初的な詩篇もまた生み出され得るであろう。つまり民謡は宮廷歌が行われている時代にも當然あつてよいのである。それが宮廷歌に採り込まれるということについては、又別の問題とせねばならない。むしろ民謡の宮廷歌への轉化ということからすれば、中央に宮廷歌を支える樂の傳統があつて始めて可能であつたとする方が自然である。もちろんこれは國風の詩が樂歌として改編されている

詩經の上古層辨別の一標準（高田）

（注<sup>1</sup>）という議論を前提とするから、松本氏の議論とは畢竟それ違ひに終るかもしれないが。ともあれ、松本氏の論據は必ずしも反論を全く許さないというほどのものではない。少なくとも絶對確實な根據ではない。したがつてその絶對年代の推定もまた疑わしい。

しかし最も有效な反論はおそらく私自身の新たな基準を提示することであろう。だがその前に私は今一つ別の立場よりする考えを取り上げよう。

ドブソン氏 (W. A. C. H. Dobson) の考えがそれである。その「言語的事實と詩經の年代」(Linguistic evidence and the dating of the Book of Odes) (一九六四、『通報』第五十一卷) という論文では、松本氏とほぼ正反對の結論、つまり頌・大雅・小雅・國風の順に古いという結論に達している。そしてそれは毛序のいう所と、全體として見た場合極めて近いものであることを指摘する。その方法について簡単にいうならば、次のようである。

ドブソン氏はすでに自らの早期上古漢語 (Early Archaic Chinese) の語法と後期上古漢語 (Late Archaic Chinese) の

語法とを作り上げてゐる。<sup>(注2)</sup>そして詩經に用いられた用法を

同じくする語のペア(克・可・能)、(胥・相)、(攸・所)、  
(俾・使)などについて検討してみると、それらは、雅・  
頌・國風についてそれぞれ片よりを示すのを見出した。克  
・胥・攸・俾など早期上古漢語的なものは頌・雅に多く用  
いられ、可・能・相・所・使など後期上古漢語的なものは  
國風に多い。もちろん出入はあるけれども、大體そのよう  
に言うことが出来る。そこから相對的な新古の層を前述の  
ように區別できるとしたのであった。

このような言語的事實よりする考察は、松本氏の方法の  
ように主觀に左右されることが少いという意味で、一層確  
實なものとしなければならぬ。松本氏は、このような語  
の分布による研究が、時代的に近接した文獻を扱う際には  
困難であろうといわれるが、その頃實際にその様な研究が  
あって、それについて具體的に検討されているのではない  
のだから、今このように提出された説明に對して、冷靜に  
考え直してみる必要はあると思われる。

以上二つの結果として相對立する説をみた。私は大筋と

して後者のドブソン氏の結論に賛成しなければならない。  
もちろんそれは私なりの探究の結果として得たものが、偶  
偶ドブソン氏の結果と一致したのであって、初めからその  
ような前提の下にこじつけたものでは決してないことを言  
つておくことは必要である。

詩經は韻文であるからすべて押韻するのをその例とする  
(周頌の一部に無韻のものがあるのはもとより例外である)。  
その押韻を基とした清朝古音學の輝かしい成果は人のみな  
知るところである。瑞典の高本漢(B. Karlgren)のその近代  
的再解釋も又人の目をおどろかせるに充分であつた。しか  
し彼らはみな詩經を資料として音韻を採つたのであって、  
音韻から詩經の年代を考えようとするものとはもとよりい  
なかつた。しかしそれは全く異とするに足りないことである。  
なぜなら彼らからすれば一應詩經を均質な言語として扱う  
ことなしには、條理を見出すことができなかったのである。  
それは彼らにとっては研究の手續上の前提であつた。しか  
しながら、かりに毛序に従えばば五百年にわたるとされ

る、その詩篇の言語に同じ枠を設定する場合には、さまざまな矛盾を生じることともまた當然とせねばならない。たとえ五百年はあまりに永きにすぎるとしても、厳密な意味での共時的研究といえるようなものから程遠いことは、常識に徴して明らかである。事實そういう矛盾はいくつか存在する。私はここでは「來」という一字について、その音韻的側面に検討を加えてみたいと思う。

「來」字は詩經の韻脚として、すべて十四見する。それらを列舉すれば左の如くである。<sup>(注3)</sup>

- |               |               |
|---------------|---------------|
| (1) 蠶・來・來・思   | 邶風・終風[30]二章   |
| (2) 思・來       | 邶風・雄雉[33]三章   |
| (3) 期・哉・時・來・思 | 王風・君子于役[66]一章 |
| (4) 來・贈       | 鄭風・女曰鷄鳴[82]三章 |
| (5) 佩・思・來     | 鄭風・子衿[91]二章   |
| (6) 疚・來       | 小雅・采芣[167]三章  |
| (7) 牧・來・載・棘   | 小雅・出車[168]一章  |
| (8) 載・來・疚     | 小雅・杕杜[169]四章  |

詩經の新古層辨別の一標準 (高田)

- |            |                |
|------------|----------------|
| (9) 來・又    | 小雅・南有嘉魚[191]四章 |
| (10) 來・疚   | 小雅・大東[203]二章   |
| (11) 來・服   | 小雅・大東[203]四章   |
| (12) 期・時・來 | 小雅・頍弁[217]二章   |
| (13) 亟・來   | 大雅・靈臺[242]一章   |
| (14) 塞・來   | 大雅・常武[263]六章   |

國風五、小雅七、大雅二。第四の例、女曰鷄鳴[82]の贈字が蒸部に入る字であり、來字とは中心母音を同じくする所謂對轉の關係の合韻であるのを除けば、他はすべて之部の正しい押韻である。もつとも贈字を貽字の誤りなりとする<sup>(注4)</sup>江永の説を取るならば、やはりきれいな正例である。今、議論の正確を期するために、確實な文獻的證據を缺く江説を取らずしばらく舊に従うこととする。

さて私はこれから如何なる時代的差異を見出そうとするのであるか。それが聲調についてであることは、少し注意して押韻例を御覽になればおわかりと思う。もともと古音學に於て、聲調の研究は、韻母・聲母のそれに較べて未

發達の分野であつたのだが、今では上代にも四聲の存在したことはほぼ常識となつてゐる。したがつて今我々は四聲について検討せねばならない。(1)(2)(3)の麤・思・期・哉・時はずべて平聲。(4)の贈は去聲であるが、今もいったように、<sup>(注5)</sup>古去聲であるが、これは詩經ではこの他に渭陽[34]に見え、思と押韻する。詩經時代には平聲であつたと考えてよい。(6)の疾は中古去聲、(7)の牧・棘は入聲、載は去聲である。(9)の又、去聲。(11)の服、入聲。(12)の期・時は平聲。(13)の亟、(14)の塞は入聲である。このように來字は詩經において平去入の三聲と押韻する。江有誥は上古の押韻例を調査し、中古の四聲と異なるものを集めて、『唐韻四聲正』一書を成した。そこでは正に、來字に平去入の三聲を認めているのである。しかし同一の文字(すなわち語)が三つの聲調、つまりは三種の音形を持つことを、一つの均質な言語體系の中に許容し得るであろうか。戴震のいわく、

「音聲有不隨故訓變者、則一言或數義、音聲有隨故訓而變者、則一字或數音」(『論韻書中字義答秦尚書蕙田』東原集・卷三)

一字多義と多音一義の發生をいったものであるが、故訓が不動であるならば、音聲は變ずるはずがない。しかし一字は一言たるべきなのである。

そこであらためて聲調の分布を見るならば、來字は(1)(2)(3)(5)(12)に於て平聲と、(6)(7)(8)(9)(10)(11)(13)(14)に於て去聲及び入聲と押韻している。(12)を除けば、それが國風と雅の區分に相應していることは一目瞭然である。

さらに説明が必要である。去聲と入聲との關係が密接であり、一類を成すことは段玉裁以來しばしば主張されて來たところであるが、いま問題になつてゐる去聲字についていうと、詩經では、載字はすべて入聲字と押韻し、ある種の入聲韻尾を持つていたことが明らかである。疾字についても事情は同じであり、一例を挙げれば、江漢[262]三章では棘・國・極と押韻する。また又字は小宛[36]二一

章で克字と押韻するから、やはり入聲韻尾をもっていたと思われるが、詩經以外では韻に入るのではない字であり、確言は出来ない。平聲字については、それらが入聲と押韻することは、少くとも詩經に於ては絶対でない。ならば國風の來字と雅の來字は、平聲類と入聲類の二類に截然と區別されることになる。その際(註6)の例は小雅ではあるが、聲調からすれば、國風の類に屬することになる。

そして國風の類が雅の類よりも層として新しいことは明らかである。後世來字は平聲のみに讀まれ、切韻系韻書も平聲にのみ收める。漢代の韻文はもちろん、遡つては楚詞にも入聲との押韻はみられない。易の韻に入聲と押韻するのは古い層を反映している。また來一麥の諧聲は更に時期として古いはずである。してみると、來は詩經の成立した時間の流れにしたがつて、入聲から平聲へ移り變つていったことがわかるのである。それは漢語の發展過程において、絶えず韻尾を襲つて消滅せしめたある力の、最も早い發現の一つである。第一次の入聲韻尾消失過程(註7)において、多くの文字は去聲という一類を形成し、そこに流れ込んだ。そ

れは少しのちの話になる。來字の場合は、それに先んじた突發的な變化であつた。平聲に入つたのは、あるいはその時期的なずれが因をなしているのではないかと私は秘かに考えている。

このように見るならば、來字の聲調の變化が詩經の新古層を辨別する重要な一標準となることがわかる。ドブソン氏の、語の分布による方法では出入がはげしく、個々の詩篇についての確實性を缺く嫌いがあつた。それはおそらく語の使用には傳承性があり、後世の人が古い語を用いるということもあり得るという關係に基くものである。一方、音韻の變化は、知らず識らずのうちに人々の言語を變容せしめる。目にみえないがゆえに意識にのぼってくることはない。押韻の上に反映した變化を、確實な證據となし得る理由であり、ここに我々は個々の詩篇についての確かな判斷を下し得る。(1)(2)(3)(4)(5)(6)(7)(8)(9)(10)(11)(12)(13)(14)よりも新しいと。

ところで私はここで、あらかじめ豫想される反論に對して辯明を試みておくべきであらう。



その一は、聲調の違いが意味の違いに對應しているのではないかという疑問である。私はいままで意味について觸れなかった。來を同じ意味の一つの語として扱ってきた。これは確かに充分な處置でないといえる。たとえば(11)大東[203]四章の例では、毛傳に「動也」と訓じ、「ねぎらう・はげます」の義に用いられている。鄭箋は「不來」とつづくのを「不見謂動」といい換えるが、動字を自動詞におきかえて説明しただけで、結局同じような意味である。のちの注釋もみなこれに従うらしく異説を知らない。王引之の『經義述聞』によれば、さらに(4)の例も同じ意味であり、鄭箋が往來の義にとるのは誤りだとい<sup>(注8)</sup>う。つまり後世「勅」とも書かれる文字の假借ということになる。それならば「勅」は廣韻「洛代切」の去聲字であり、「來」の平聲と對立する。しかしこれが成り立ち得ないことは、他の例ではすべて、明らかに往來の來、毛傳のいう「至也」の意味に用いられており、しかも(6)(7)(8)(9)(10)(13)(14)が、私のいう入聲類であることからわかる。もっとも意味を異にする(11)の例は新古層の決定については保留さるべきである。しかし

それが國風よりも新しいものだとする理由にもならない。

第二の豫想される反論は次のようなものである。上古では之部の入聲に對する平上去の三聲は \**ʷə* のような濁音の韵尾を持っていた。したがって來は \**le* であり、たとえば(1)では 羆 \**miək*、來 \**le*、來 \**le*、思 \**geis*、(7)では 牧 \**miök*、來 \**le*、載 \**deʷ*、棘 \**iek* のようになり、<sup>(注9)</sup>別に時代的な層序を考えることなく平聲とも去聲とも、又入聲とも押韵が可能だとするのである。もちろんその場合、來は通じて平聲のままであると考えられている。董同龢『上古音韻表稿』も平聲の一讀しか取っていない。もしそうならば、國風ではすべてが平聲と押韵し、大小雅では(12)の一例を除いて、やはりその他すべてが去入聲と押韵するという我々の見た分布はまったく偶然的なものにすぎないのであろうか。私はそうは思わない。一般に詩經の押韵は極めて嚴密であり、聲調についても同じことが言える。國風だけについて見た場合、その 2025 の韵脚中、聲調の諧和しないものはわずか 88 であるという報告がなされている。<sup>(注10)</sup>かく嚴密な詩經の韵にあって、この來字のみが、偶然に聲

調の諸和を破って、多く去入聲と押韻するということは考えられない。その上、去入聲と押韻するものが、平聲の倍以上であるということにおいては一層のことである。これは當然二類に分かつべきものだと思う。

また\*<sup>(注II)</sup>のような濁塞音の韻尾を設定した上で上古の聲調を考える立場では、前述した去入聲の近さを説明するのに、去入聲が聲調の型を同じくしたことを主張する。平上と入は韻尾も調型も異なるが、去と入は韻尾は違っても調型が同じだから通押が許される、したがって去と入の通押が多いというのである。このような説明も特に平聲と入聲の關係を説明する原理が與えられていない以上、來字を平聲とのみする限りにおいて、全く事情を糊塗するものでしかない。

一體このような濁塞音韻尾説は、決して未だ定論となすべきものではないのである。<sup>(注I)</sup>だからその上に立って本稿の主旨を否定し去ることはあたらない。實はといえば、それはもともと高本漢以下の上古音説を批判し、音韻資料としての詩經の性格を検討してゆくなかで見出されたものなの

詩經の新古層辨別の一標準(高田)

である。

以上のべた私の考えが正しいとすれば、過去の詩經の年代測定、とりわけ松本氏のそれは訂正されねばならない。將來の同様な試みもまた、この標準からはずれるものであつてはならない。<sup>(12)</sup>の例にみるごとく小雅のあるものは國風と時代を交するものが含まれているかもしれないが、全體としては國風は大雅・小雅よりも新しいものである。少くとも<sup>(1)</sup><sup>(2)</sup><sup>(3)</sup><sup>(5)</sup><sup>(12)</sup>は<sup>(6)</sup><sup>(7)</sup><sup>(8)</sup><sup>(9)</sup><sup>(10)</sup><sup>(13)</sup><sup>(14)</sup>より晚れることは確言し得る。個々の詩の年代についてはもちろん問題は多いが、國風と雅の新古については、ドブソン氏のいうように毛序はただしく傳承しているといえる。漢はやはり三代に近いとすべきである。

注

(1) 顧頡剛「從詩經中整理出歌謠的意見」《歌謠週刊》三十九期、又『古史辨』第三冊)、屈萬里「論國風非民間歌謠的本來面目」《史語所『集刊』第三十四本、又『書傳論學集』など。

(2) 《Late Archaic Chinese》(1959, Toronto). 《Early Archaic Chinese》(1962, Toronto)

(3) 白駒〔〇〇〕三章「皎皎白駒、賁然來思、爾公爾侯、逸豫無期、慎爾優遊、勉爾通思」段玉裁・王念孫は「來・期・思」を韵とするが、江有誥およびわが大矢透翁は「思・期・思」をとる。いま後者を是として録さない。

(4) 江永『古韻標準』去聲第十部にいう、「雜佩目贈之、贈當作貽」江有誥『詩經韻讀』はこの説を引く。馬瑞辰の『傳箋通釋』以來詩注釋家はこれを戴震の説として引用することが多いが、恐らくは『毛鄭詩考正』の「女曰鷄鳴三章、雜佩以贈之、震按以韻讀之、贈當作貽、蓋字形轉寫之訛」というのに依るものである。しかし、戴震の「答段若膺論韻」に「女曰鷄鳴三章贈字、江〔永〕先生謂貽字譌爲贈、不必以改字爲嫌、而讀來如凌也」とあるのを見れば、戴氏は江氏の説に従ったのであり、必ずしもその首唱者ではない。

(5) 大矢翁『周代古音考韻徵』も平聲とする。

(6) この詩には(胥・相)のうち相字が用いられており、ドブソン氏の標準に従えば、やはりそれ程古いものとすることはできない。

(7) もちろん近代の北方語に生じたそれに對していう。

(8) 『經義述聞』第五、「知子之來之」「知子之來之、雜佩以贈之、引之謹案、來讀爲勞來之來、爾雅曰、勞來勤也、言知子之恩勤之、我則雜佩以贈之也、小雅大東篇、東人之子、職勞不來、毛傳曰、來勤也、正義曰、以不被勞來爲不見勤、故采薇序云、杖杜以動歸、即是勞來也、是古者謂相恩勤爲來、

此言來之、下言順之、好之、義相因也、箋讀爲往來之來、疏矣」

(9) 音標は高本漢の Stockholm version (1950) による。

asceticism はもちろんそれが再構形であることを示す。再構された中古音の上に再構されたこの上古音形は正しくは二つ \* をつけるべきである。

(10) 馬幾道 (Gilbert L. Mattos) 「國風中聲調不協的韻脚」(Tonal "anomalies" in the Kuo Feng Odes) 『清華學報』新九卷第一・二期合刊、一九七二)

(11) 董同龢『漢語音韻學』(臺北一九五八)第十三章、「上古聲調的問題」および張日昇「試論上古四聲」(『香港中文大學中國文化研究所學報』第一卷)など参照。

(12) 拙稿「上古濁塞音韵尾について」(『均社論叢』一一二)参照。